

先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も五十巻を数えます。

檀信徒の皆さまに親しみを込め、分かり易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

「二年先を見る者は花を育てる。十年先を見る者は木を育てる。百年先を見る者は人を育てる。」……百年先を見据え育英会を設立したそのお心に触れたいと思います。

留学生交流を支えて

黒田武志

なぜ留学僧育英会を

つくったか

誓願

いまから十一年前といえば、私が住職を務め

ている横浜善光寺が、ちょうど開創十五周年を迎えた年です。ゼロから出発した私が、寺を持ち、発展させることができましたのも、みほとけのお導きと心温かい多くの方々の力添えのおかげ——これをひとつの節目としてなんとかみなさんにご恩返しができないものかと考えてお

りました。その具体化が、人を育てることだったのです。海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和にやさかなりとも貢献したいと。

一寺の住職がこのような大誓願を立てましたが、「そんなことできるわけがない」と思われた方も少なくなかったのではないかと思います。でも私はなにことも信念を持って行えば、かならず実現できると信じて生きてまいりました。このように思えるようになったのも、若き日の貴重な体験の数々があつたからではないかと思えます。

修行の始まり

そのとき私は、逆方向の急行列車に乗っていたことに気づきました。まさかこの手違いが、甘えた私の心を叩きなやすために、ほとけさまが与えてくださった修行の第一歩となるうとは、

思いもよらぬことでした。

僧侶の兄が、開教師としてアメリカに渡るようになったのは、私が高校三年の夏のこと。世界中を歩いていろんなことを見てみたい。そんな夢を抱いて私は、ぜひ連れていってくれと頼みました。

「それならまず仏教を学べ」

それが兄の返事でした。それで私は、僧侶になる決心をして、大学で仏教を学んだのです。大学院もすませ、本山の總持寺に入りました。その後、永平寺に入ったのも、アメリカへ行きたい一心のことでした。

せつかく寺に入っても、そういう我慢修行ですから、ほんとうの修行ではありません。こんなことをしていて、いったい何になるんだらうと、まったくやりきれない気持ちで下積み修行をやっておりました。こんな未熟な心でいたからでしょう。永平寺では体を壊してしまいました



第一回生（田中智誠師（右）・梅田尚平師（左））を
タイ・ワットパクナムに激励に行く黒田理事長

た。それで下山して福井駅から東京に帰るつもりで、列車に乗ったという次第なのです。

列車が逆方向と気づいても、いまさら引き返すこともできず（お金を持っていませんでし

た）、私は富山まで行きました。そこには学生時代の友人がおりました。彼の勧めで托鉢（たくはつ）してみると、たちまちたくさんのお喜捨が集まるのではないですか。

これなら手持ちがなくなると悠々と行脚（あんぎゃ）ができる。よし、全国を回ってみようという気になり、私の托鉢行脚が始まったのです。いまから思えば当然のことながら、世の中よいことばかりでないことを、この長い行脚で思い知らされることになりました。

生かされていることに気づく

北陸、山陰、九州と回り、それから山陽を通って年も暮れ近く、私は京都にきていました。

雨が何日も続いていました。宿を求めて、お寺の門を叩いてまわりましたが、法衣はボロボロ、草鞋履（わらじ）きの足はドロドロ、馬糞のような臭いを立ちのぼらせている私に、よい返事は返ってき

ません。馱で眠るには寒すぎる。

やっと一軒の木賃宿を見つけました。そのときの所持金が三百五十円です。宿代が素泊まりで二百五十円。銭湯（宿の主人がお風呂呂に入るのを嫌がる様子なので、一キロ先まで歩いて行ったのです）が十六円。コッペパンなどを買って宿に戻りました。

朝から何も食べていなかったのです。残ったお金を机の上に並べてみました。二十五円。ため息が出ました。明日の命もわからない、みすぼらしい僧侶。それが私の姿だったのです。

翌朝、雨の中、宿を出て行かねばなりません。おれはいったい何をしているんだろう。はじめさのどん底で、私は雨を眺めてぼんやりとしておりました。

その時です。こんな思いが突如として立ち現れたのです。おれは僧侶じゃないか。自分の生

活を心配している場合じゃない。僧侶の役目はまずお経をあげることじゃないか！ 簡単なことなんです。しかし、それまでは気づかなかつたのです。

霧が晴れるような思いで、私は宿屋のご主人に頼み込み、お経をあげさせてもらいました。お経をかみしめながら唱えていると、ご主人のやさしさがありがたく身にしみてくるのでした。こんな私を追い払わずに泊めてくださったのですから……。

感謝の思いでいっぱいのまま、ザンザン降りの町を、私は大きな声で「般若心経」を唱えて歩きました。門前払いの言葉も、私を磨いてくださる声に聞こえました。

午後を過ぎて雨も上がりかけた頃、女子校の前を通りかかりましたら、ひとりの女学生から十円の喜捨……その十円の尊さ、ありがたさ！ 気づくと私は土下座をして感謝を申し上げて

いたのです。すると次々とみなさんがご喜捨してくださいました。

こんな私などに、なんでもつたないこと。感謝で胸が詰まりそうになったその瞬間、太陽の光がサーッと私の目に射し込んできました。

ああ、私は生かされている！

この身はほとけさまにおまかせしていればいいのだ！

一人ひとりの中にほとけさまはいらっしゃる！

……このときの感動をどう表現したらいいものか……。

それからです。状況は同じでも、心の中は豊かでやすらいだ思いで満たされるようになりました。怖いこともうれいことも超越して、これでもいいという心境になることができたのです。

どんな体験も修行である

全国行脚を終え、私は再び總持寺に入りました。自らの意志です。三年間の修行ののち、タイで一年学び、アメリカへ発ったのはそれからです。十八歳のときに夢見たアメリカでしたが、実現したのは三十を過ぎてからでした。

しかしです。もし私が、簡単にアメリカ行きを許されていたら、人の尊さ、ありがたさに気づかぬまま、うわべだけの仏教論を説いていたことでしょう。

私が若い僧侶を見ると、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてしまいます。どんなつらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。

あのときの感動を多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ちだが、私に「育英会」をつくらせたのです。

横浜善光寺留学僧

育英会十五年の歩み

日本は世界最大の仏教国です。しかし遺憾ながら、日本仏教界の現状は、依然として直接吸入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるかのように受け止めています。

世界の太勢に即応して教化の実をあげる態勢がまだできていないのです。さまざまな宗派に枝分かれた現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、なかなか各宗派が一丸となって事にあたるのはむずかしい。私たちが忘れてならないことは、現実を踏まえ、過去をかえりみ、未来の方向を見直すことです。

人々の安心・平和・幸福を導く伝導界の改革はおろか、世界が滅びの道を突き進むのを止めることはできません。少しでも、その速度をゆる

やかにするために、一人でも多くの人が力を合わせて、礎を築く必要があります。

私も新寺建立の初心に立ち還り、釈尊の教え——「真実」の教えが絶えることなく伝わって

いくようにするために、いまこそ、世界的視野に立ち教化できる人材育成こそ急務と観じ、「海外留学僧派遣」という大誓願を立てたのでした。

所謂ひとりの仕事には限りがあります。多くのあらゆる分野・衆知を集めねばなりません。しかし宗務当局や本山ならいざしらず、金も力もない一寺の住職がそのような壮大な大誓願を立てそれを実行することはいささか僭越があります。それだけに心配してくださる方。また、「そんなことができるわけがない」という声も設立当初は囁かれました。

関心をもってくださいる方には、ありがたいと思っておりました。でも、これは私が賦与された天の使命。生まれたときから、私の歩むべき

道がありました。私は自分の歩むべき道を一所懸命歩く。私の運命と思ひ唯ひたすら歩いてきました。何事も信念を持つて行えば必ず実を結びと信じて歩いてきました。

「法輪転ずるところ食輪転ず」と言われます。私は檀信徒のみなさまに、「毎度の食事ごとにおかず一口分だけ減らしてご協力してください。それで熱意のある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未だの平和のために！」とお願ひし一人一仏と続けて参りました。

そして、昭和五十九年一月、東隆眞、黒田俊雄、佐藤俊明、鷲見透玄、中村治雄、奈良康明という各先生方を育英会設立準備委員（後に理事）とし、最高の頭脳と活動力を得て、昭和六十年、記念すべき留学僧第一回生二名をタイのワット・パクナムへ留学させることができた

のです。半年後、ワット・パクナムの住職に、「二人は稀にみる熱心さで、模範的な留学僧だ」と称賛され、私のよるこびは計り知れないものがありました。

翌年、アメリカとインド、スリランカへ四名、その翌年は、アメリカ、タイ、インドへ五名、中国から一人受け入れ……第四回、五回、六回と、留学僧の派遣が実現し、立派に成長した留学僧の各方面での活躍は頼もしい限りです。あれから十五年の月日がたち、留学僧は延べ八十八名にのびりました。日本の若者を海外に派遣するばかりでなく、海外から日本に受け入れる人数も増えて参りました。

育英会の関係国はすでに十八カ国（一地域）、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリア）。受け入れ国は九カ国・一



昭和62年7月30日留学僧育英会 第2回総会

地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バン格拉デイシユ・日本・台湾・ポーランド・ベトナム）になっています。

【令和二年第三十三回生まで、育英生百二十六名、関係国二十五ヶ国及び二地域】

留学僧の募集の範囲は、宗派を問わず、場合によっては僧籍がなくてもよし。学業操行とも優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るがないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまずの人材——そうした世界の若者を選んで、留学中の旅費、生活費を負担して来ました。よくもまあ今日までこの至難の「行」が出来たこと不思議でなりません。

「檀家を敬うこと、仏のごとくすべし」という瑩山禅師の教えに従い、留学僧派遣・受け入れという一大事業の実現こそみ仏の成せるお力と思わずにはおられません。

寺檀一体となって各国に派遣された留学僧た

ちは、それぞれの立場で物を見、考え、修行にとりこんでおります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それはまったく未知数ですが、必ずや宗教宗派意識を超えて釈尊の教えを忠実に情熱を持って布教教化する国際的宗教者となってくれるであろうと私は信じています。

やがて十年後、二十年後の世界に生き活きたした仏法の泉を湧かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、世の中のなにかがしかの役に立ち、一隅を照らすことができればよろこびです。

育英生たちには学んだことにつきレポートの提出を義務づけております。

(第二十九卷 抜粋)

